



武蔵ヶ丘小学校 5年 前田 零煌

人権啓発標語

一つの声 一つの勇気で 救われる

「容姿の偏見について感じたこと」



今の自分に自信を持って堂々としていたい

私は、小学1年生からバスケットボールをしています。小さい頃は色が白くてぼっちょりしていて髪も長かったため、どこからどう見ても女の子でした。バスケットをする時、学年が上がるにつれてプレーも激しくなり、髪が短い方がいいと思います。まずは肩のところまで切りました。それでも動きのじゃまになると感じるものが多くなり、ショートカットにしました。この時、私の外見が変わり始めました。私には二つ違いの兄がいます。買い物に行った時、二人で並んでいると、「ボクたち」と声を掛けられました。初めて男の子と間違われました。その時は、「えっ」という感じでしたが、隣にいた母が「女の子なんですよ」と店員さんに言いました。スポーツをしている男の子に見えたみたいでした。私はその時は何も思わず「間違わ

れた」と笑っていました。そこまで短くなかったショートヘアが中学校に入ってからほとんど短くなっていき、刈り上げるようになりまして。それが、スポーツをする中で一番フィットしていたからです。身長も伸びて筋力もたくさんつきました。見た目で間違われることが中学生になって本当にも多くなりました。私は正直どちらも構いません。嫌だと思ったこともないし、男子とみられてはざかしいと思ったこともありません。なぜなら、何も知らない他人が「男だ」「女だ」と言っても私には何の関係もないからです。祖母がよく言います。「こんなに髪を短くしなくても」「かわいらしい洋服を着たらいいのに」と。そんな風に言われることが一番嫌いです。男だから、女だからの時代はもう古いと思います。私はそうしたいと思ってそういう風にしていくから「別にいいじゃん」と返します。見た目は男子でも女子です。でも行儀が悪すぎて親によく注意されます。男になりたいと思ったことはありませんが、何

で男に間違われるんだろうと考えたことはありません。私も外見だけで人を判断して男か女かどっちだろうと思うことがあります。見た目で判断して間違ったこともありませぬ。人にはそれぞれのイメージがあるからだと思います。私が男子に間違われても気にしません。正確に言えば気になりませぬ。どちらでもいいです。しかし、そうではない人もいることを考えなければいけません。悪気のない一言が誰かを傷つけている可能性があるというところ。来年から中学校の制服がスカートとスラックスの両方を選択できるようにします。時代の流れかもしれないですが、すぐいいことだと思えます。スカートは女子、スラックスは男子という固定観念がなくなるからです。でもその反対に男子が選べないのはなぜだろうと思えます。もしかししたら男子でもスカートをはきたい人がいるかもしれないと思えます。母が中学生の頃の話を聞くことがありますが、今では信じられ

ないことばかりです。一番分かりやすいのが体操服と水着です。その時にも性に違和感を持った人はいたはずだけど「男の子は男の子らしく」「女の子は女の子らしく」の時代です。私の母もショートヘアで「男まさり」と言われていたそうです。スカートをはくことが嫌いで普段はズボンばかりはいていたそうです。その話を聞いて親子だなと思いました。性の多様性が認められる時代ですが、そのことだけではなく、人種差別や貧困などさまざまな差別となる要因があります。気にし過ぎることも差別で、気にしないことも差別。私は人を安易に傷付けたり、不快になるような事を言ったりしないように心がけていきたいです。自分にとってはいいことでも、他の人にとってはそうではないということを忘れないようにしたいです。自分の思い込みを人に押し付けることがそれぞれ個性を尊重することにつながります。私は今の自分に自信をもって堂々としていきたいです。

先生から

「自分の思い込みを人に押し付けたくないことが、それぞれの個性を尊重することにつながる」本当にその通りだと思います。外見や固定観念にとらわれないことなく誰もが生きやすい社会をみんなで作っていききたいですね。

学校だより 68

武蔵ヶ丘北小学校



『あいさつ 笑顔 思いやり すすんで学ぶ 武北っ子』

学校で友達や先生などと会ったときに、進んであいさつをする児童が増えました。令和5年度の本校の教育目標である「笑顔」での「あいさつ」ができるようになってきています。また、学校だけでなく地域の中で「進んであいさつ」ができることも大切に行っています。そのために、毎朝生活安全委員会と運営委員会が校門に並んで「あいさつ運動」を行って「あいさつ」への意識を高めています。



朝のあいさつ運動

きくよう文芸 11月



菊陽句会報

カボス香や今生の幸老いを生き	紫藤 祥子	縁側の風つつましき秋桜	田中 郁子
祝ふ席囲む町屋の薄紅葉	曾我 育代	マスクして目で挨拶のりハ仲間	寺尾千代子
八十路とて庭木の手入れ天高し	曾我トモ子	副賞のジャンボの梨は背にずしり	財津 早雪
新大豆ぎりぎり一杯一斗枥	緒方チエ子	しなやかに花の重さに萩の道	原野レイ子
秋の事故はげます言葉探しけり	米山るみ子	猫じやらしまでも色づく里の道	高橋 孝子
ランチしてコスモス見て楽しい日	吉田 幸子	離れゆく久遠の里や夕芒	北川しんじ
霜降の寒暖惑ふ阿蘇暮し	木村 信子	心にも杖欲し夜長独り部屋	佐藤 澄世

短歌会

幾重にぞ開く黄のバラ淡々し通りすがりの門口に見る	有久 賢治
夏枯れて補植したりしリーフレタスの出荷を始める緑葉立ち	梅田 國雄
日に向きて庭に咲きいるマリーゴールド眩しきまでに映ゆるその色	佐藤せい子
葉を落とし膨らむ鞘は列をなす大豆畑に置く今朝の霜	中村トシエ
見上げれば青空覆う樹々の影六千年と命繋いで	馬場 礼子
バタ足のしぶきは高く進んでる頭に水をかぶりながらも	松本 東亜